

あとがきにかえて

東大方式と観光まちづくりツアー



観光まちづくりもアクシデントを乗り越えて

2009年4月吉野山バスツアーの帰路、三重県で対向車が転倒、ツアーコンらが起こし運転女性無傷 (by Sakai)

幻想曲「佐原ツアー物語」

「大変お待たせいたしました。全員おそろいになりましたので、改めまして、おはようございます。このたびは、東大まちづくり佐原基地見学ツアーに全国の観光学科の学生さんをはじめ、多数ご参加いただきまして、重ねて御礼申し上げます。本日いちにちお供させていただくことになりました、東大ツアーコンの と申します。佐原プロジェクトのメンバーです。東大方式という都市デザイン研究室の大学院生たちによる観光まちづくりの拠点づくりは、大事な社会実験としてこれからまいります佐原をはじめ、10以上の地域で行っていて、佐原はその基幹基地です。どの基地にも学生ツアーコンがいてご案内しております。本日は各基地からメンバーが集まって、歓迎の祝典を準備いたしております。これか1時間半で到着いたします。どうかよろしく願いいたします」

快晴の下、新宿西口の集合地における「ぐるぎ+東大」と赤地に白く染め抜いた小旗をかざした俊才風 院生のあいさつが受けて、幻想の東大基地ツアー第一陣は大拍手のなかを出発した。小江戸と呼ばれる佐原に着いて、とある空き家で歓迎会が開かれた。「ぐるぎ」は、「ぐるり」というツーリズムの巡りとリサイクルを象徴し、さらに+によって無限大の意味を込めたロゴである。

そこは佐原プロジェクトが、リサイクルの古着屋実験をしたところで、また空き家にもどっていたのを掃除して開放したのだった。入り口には「ぐるぎ+佐原」と染め抜いた幟と紺地の暖簾がにぎにぎしく、はっぴ姿の院生20人が勢ぞろいして迎えた。

屋内には「歓迎ご一行様 ぐるぎ+一同」の横断幕が張られ、小机の演台で3人の歓迎スピーチが始まった。佐原の観光まちづくり資料とともに、「まちづくりプロジェクト委員会」発行の月刊誌が配られ、『東大まちづくりプロジェクト方式の構想力』の近刊予告がアナウンスされるなか、にこやかに窪田准教授が立った。そして、ツアーのお礼と佐原プロジェクトの活動経過を話したあと、西村幸夫教授の演説に移った。毎年忘年会での名演説は有名で、この日もその片鱗をみせて、会場は熱気に包まれた。

<よくお越しいただきました。うちの研究室の学生は、こうした社会実験をよそ者として現場のまちに入って2、3年つづけ、「風のように」去っていくことを運命づけられています。そのような

制約を踏まえてなお、現地の人たちに「しょせん、学生さんのということだから」といわれないように説得力のある仕事をといつもっております。それには、何がいちばん必要でしょうか。

君たちができること、それは想像すること。文献を緻密に調査し、現地を大胆に踏査するなかで、想像力を羽ばたかせよ。君たちがプロジェクトとして、仕事として行っている「まちづくり」は、血の通ったもの、人びとの心に訴えるものとなるようにと説きます。きょうはその成果を披露して、きっとみなさん方の心に残るツアーになります。

「現場にこそ事実と真実が存する」のです。それをモットーに黙々と励んでいる学生たちの心意気を感じてやってください。>

大拍手が終わると、まちづくりプロジェクト委員長の院生が、われわれは何のために何をしているのか、なぜツアコンなのか、なぜ観光まちづくりなのか、それは否、それは否と自己否定しつつ絶叫する弁論部のようになりかけるのを抑えたところで、遠藤・野原・中島のまちづくりプロジェクト育ての教官が小机の前に出て、達者な語り口で観光まちづくりと東大方式などについて個性的なコメントを述べた。そこで、一斉に学生たちの手料理が出て昼食会。

アトラクションは、佐原プロジェクト十八番の「夕涼みイベント」パフォーマンスで、くだんの名ショットを再現した。それだけでは芸がないので、古着ファッションショーとミックスした寸劇にして盛り上げ、最後に駆けつけた市長があいさつし、その音頭で三本締め。

次いで「ぐるぎ+東大」の小旗を持った学生ツアコンたちの案内で、佐原プロジェクトが「夢見るくら」として開放した中村屋倉庫などの活動ポイントや、重伝建地区、初めて日本全土の地図を作成し、ツーリズムに偉大な貢献をした伊能忠敬記念館を参観後、小野川でさわら舟遊びを楽しんだ。

帰路は、最近増えつつけている全国の観光学部・学科からのツアー参加学生と元気な一般参加者による「口舌本日感想物語」がマイクを回して行われ、今後の周遊企画への期待も述べられた。最後に、ツアコン院生が抱負を述べて拍手喝采のうちに、夕方6時半、新宿西口に無事帰着した。

この項は願望による構成であるが、東大方式の主演は学生であり、「ポイント30」にも書いたように、学生たちに第二の故郷意識を持って、地元に接してほしいと思う。実際はその意識がすでに生まれていることは、就職して3年後に旧大野村へ4人で訪ねた「大野村再訪記」などが、『都市デザイン研マガジン』18号(2006.1.1)に載っていることでも分かる。

また、2006年5月、喜多方へ初めて参加したM1石井宏典は、「喜多方の星雲に誓う」と題して初体験の万感を詩に託した手記を27号に寄せたが、次の結びは忘れられない。東大方式のバックボーンである。

机上で都市計画を学んで2年半、「責任」という重い荷と引き換えに、ようやく、そして少しだけれど、知識を社会に還元できる舞台をいただけた、という気持ちです。初心に灯る期待を糧に、まちづくりの先輩方に学び、新メンバーと協力しつつ、これから精一杯力をつくしたいと思います！

(元研究生・『都市デザイン研マガジン』初代編集長)